

『Choices, Values, and Frames』

Edited by Daniel Kahneman and Amos Tversky



佐々木 宏樹

現在、近代経済学研究の主流である新古典派経済学は合理的な個人を仮定している。しかし、同理論では説明できない経済現象が多々存在するのも事実である。例えば、以下の二つの設問についてどちらか一方、好ましい方を直感で選んで頂きたい。

設問1：選択肢 A「80%の確率で4,000\$ 得る、20%の確率で0\$」

          選択肢 B「確実に3,000\$ 得る」

設問2：選択肢 C「80%の確率で4,000\$ 失う、20%の確率で0\$」

          選択肢 D「確実に3,000\$ 失う」

実験結果に寄れば、8割以上の方が、選択肢 B と C を選んでいる。期待利得を計算すれば明らかだが、設問1の利得局面では期待利得の少ない方、設問2の損失局面では期待損失の大きい方を選んでいる事になる。合理的なくできるだけ多くの利益を獲得しようとする) 行動を取らないのである。

本書は、2002年にノーベル経済学賞を受賞した Kahneman と故 Tversky がまとめた意志決定理論に関する書籍であり、いくつかのテーマごとに有名な論文がおさめられている。彼らの最大の貢献は、経済学に心理学を持ち込み、経済学のアノマリー（合理的思考に整合しない事実または考え方）に説明を与えた事にある。Kahneman は認知心理学者であり、受賞当時は心理学者が経済学賞を受賞したと話題になったことは記憶に新しい。彼らは、不確実性下での個人の意志決定を体系化し、記述した『プロスペクト理論』と呼ばれる一連の理論を構築した。このプロスペクト理論は1979年に *Econometrica* において発表されたのが最初であるが、以降多くの研究者たちにより発展されてきた。引用数の最も多い論

文の一つにも数えられている。初めの設問もこの論文に集録されており、Reflection Effect と呼ばれる現象である。さらに彼らは、1992年にプロスペクト理論をさらに精査した論文を発表した（いずれも本書に集録）。

ここで、彼らのプロスペクト理論の中身を簡単に紹介しよう。プロスペクト理論は二つのキーから成り立っている。一つは価値関数 (Value Function) である。価値関数とは、期待効用理論における効用関数に対応するとされる。S字の形状を持ち、利得局面では危険回避的に、損失局面では危険愛好的になることを表す。初めの設問もこの関数型から説明可能である。また、個人の価値判断は、利得の大小ではなく参照点 (Reference Point) からの変化から行なわれ、利得よりも損失を過大に評価することも示す。二つ目は、加重関数 (Weighting Function) である。個人は事象がおこる客観的な確率ではなく、自らの主観的確率を基に意志決定を行ない、小さい確率は過大に、大きい確率は過小に評価するとされる。彼らは多くの実験からこれらの事実を明らかにした。

現実的な社会現象、社会問題についてもプロスペクト理論で説明可能なことは多い。本書の中で、Camerer が実社会における実証研究の概観を行なっている。これによれば、株式市場、労働経済、消費財、マクロ経済、消費者行動、競馬の賭行動、保険、宝くじ等を対象とした行動についても、経済学的分析に加えて心理学的なアプローチを取ることにより、従来では説明できなかった事に対して、体系的な説明を与えているのである。

さて、政策研究・制度研究に目を向ければ、昨今、心理学的基礎を持った研究が大いに関心を集めている。生身の人間を対象とするのだから、従来の均衡概念だけでは説明できないのは当然かもしれない。本書において取り上げられている論文を初めとした研究は今後一層の発達が予想される。学術研究に新たなアイデアを供給してくれるばかりでなく、政策の企画立案の際にも一つの参考にもなるものだ。今後は、プロスペクト理論に代表される行動経済学の成果を政策に適用させていくことが、研究者の大きな課題となろう。